

進化し、そして生き残る学会に

大木 裕史
(株式会社ニコン)

完全な独り立ちを選んで歩き出した日本光学会に、まずは謹んで祝福の言葉を述べさせていただきます。ここに至るまでには、おそらく幹事会や常任幹事会、あるいはそのほかの場で多くの議論が繰り返さされてきたことと思えます。この先の道は必ずしも平坦ではないかもしれませんが、設立を決意された方々の高い志が長く受け継がれてゆくことを切に望みます。

新たな日本光学会は光学の広い領域をカバーすることは当然と思えますが、企業に所属している者のひとりとして、やはり日本の光学産業活性化への貢献を期待せずにはいられません。光学産業はときに「日本のものづくり最後の砦」ともいわれるように、伝統的に日本が非常に強い力をもつ技術分野です。その一方で、大学における産業直結の光学教育は、しだいにカリキュラムから姿を消す方向にあります。こういう状況の中で、光学産業は技術力の維持向上に絶え間なく努力してゆく必要に迫られています。

ものづくりに関しては、光学産業に限らずおよそあらゆる製造業において、社員にその企業なりのスピリットが叩き込まれていると思います。一方で、研究開発系のレベル向上においては、学会活動が非常に重要であると私は思っています。企業に入社後、私が最初に学術論文を投稿したのは「光学」誌で、今からちょうど30年前になります。初めての投稿でどきどきしましたが、掲載されたときは本当に嬉しく、研究者の世界の仲間入りができたような気がしたものです。その後当時の光学懇話会とのつながりも強くなり、庶務幹事を務めているときに、光学懇話会から日本光学会（応用物理学会分科会）への改名がありました。Optical Review では立ち上げ前の委員会からメンバーに加わり、寄付金集めや表紙デザインでも奔走しました。表紙

はもともとクリーム色のデザインに決まっていたのですが、最後になって、当時の編集委員長であった伊藤良一先生の「青がよい」の一言で深い青色に変更され、これが最近にいたるまで続いていました。おっと、この場は私の履歴書を書くところではありませんでした。話を戻しましょう。

各企業が叩き込むものづくりの精神と違って、研究開発のスピリットは、学会における議論・討論が育成する部分にはなはだ多いと思います。日本光学会の使命はもちろん多岐にわたっていますが、光学産業を担う若手～中堅技術者に発表と議論の場を与え、それを光学産業全体の開発力維持向上に結び付けていくことを、新体制となってからも重要な役割と認識していただければ幸いです。

ただ、光学産業が携わる技術の世界は、どの産業でも同じですが、急速にクロスオーバー化が進んでいます。エレクトロニクスが不要な光学製品は次第に少なくなり、光学装置はより広範な技術と組み合わせたシステム化へ、ソリューション製品へと変貌しつつあります。これは産業分野だけのことではなく、個々の研究開発を何かのアプリケーションにつなげようとするとき、多くの場合にさらなる合わせ技が要求される時代になっています。その意味では、純粋な光学技術のコアの部分と、それを生かす周辺技術のどちらも重要であり、やがて日本光学会がカバーする領域がきわめて広がっていくのは必然ではないかと思えます。

ダーウィンのあまりに有名な進化論では、「(強いものが生き残るのではなく)変化できるものが生き残る」とされています。学会も産業もこの通りであると思う今日このごろです。